若越郷土研究
48の2

越前笏谷石の石造物に見る荘厳形式とその変遷について

三井紀生

一　はじめに

旧くから板碑、多層塔や宝篋印塔の塔身、五輪塔の各輪などに彫られている梵字種子は蓮華座や月輪によって、また、これらの基礎は、格狭間などによって荘厳されていることが多い。宝篋印塔の基礎に例えれば、関東式とか、関西式とか、格狭間の内側に蓮華の花葉が彫られた近江地方独特の形式とか、それぞれの地方で歴史と共にはぐくまれてきた荘厳形式がある。

古墳時代から延々と越前の地で掘り続けられてきた笏谷石は、かなり旧い時代から日本海沿岸地域へ移出されているが、近年北前船の研究が盛んになって各地の多くの人々に知られるようになった。この長い利用の歴史の間に、板碑、多層塔、宝篋印塔および五輪塔などの荘厳、また、墓標や石龕・石廟などの荘厳やデザインに、つぎのような越前独特のものが生まれた。

（1）月輪の外周に小蓮弁をめぐらせた荘厳形式

（2）竪連子と格狭間を組み合わせた荘厳形式

（3）屋形風石龕および石廟

（4）唐破風屋根を有する墓標

笏谷石の石造物に特定して見られるこれら荘厳形式は、川勝政太郎氏、増永常雄氏および京田良志氏が、すでに昭和三十年代に指摘[1]され「越前式荘厳（形式）」と命名され、関連する遺品に関する多くの研究報告がなされている。その後、山本昭治氏らも加わり、新しい遺品が次々と発見され、報告されている。「越前式荘厳（形式）」に関連する各種の用語も、現在では普遍化しているので、前述の諸先輩に敬意を表し拙者も使用させていただいている。今回の報告は、先輩諸氏の研究成果の恵与にあずかりながら、拙者がこれまで調査してきた結果も合わせて、荘厳形式の特徴および時代の経過にともなう変遷について、現物を通して考察し、集約することを試みたものである。

二　月輪の外周に小蓮弁を巡らせた荘厳形式

十三世紀の紀年銘を有する笏谷石製の石塔類に彫られた梵字種子（以下梵字という）をとりまく月輪の外周に、多数の小蓮弁を配置するという越前独特の荘厳形式が発見された。春江町井向の白山神社にある文永十一（一二七四）年銘の板碑（写真1）は、越前における紀年銘ある石造物では現状最古（成形板碑では北陸地方最古）のものであるが、この板碑に、すでにこの荘厳形式が採用されている。

その他、多層塔の塔身などで、紀年銘が確認されている代表的なものは、福井市本堂町の高雄神社にある正応三（一二九〇）年の七重塔（写真2）、朝日町大谷寺の元亨三（一三二三）年の九重塔（写真7）、観応三（一三五二）年の丸山宝塔（写真9）および春江

町高江の住吉神社にある正慶元（一三三二）年の板碑（写真10）などがあり、いずれも十三世紀末期から十四世紀中期のもので、月輪外周に彫られている小蓮弁の形状、大きさおよび蓮華座の形状（一部に反花座がみられるが）は類似と見る。

十三世紀から十五世紀（一部十六世紀）の遺品に見られるこの荘厳形式は、非常に繊細なデザインで、かつ緻密加工されているが、十六世紀から十七世紀へと時の経過と共に、デザインは大胆かつダイナミック、加工はシンプルなものに変化している。具体的にいえば、変化の内容は次の四点である。

第一は小蓮弁の形状およびサイズの変化と、この変化に伴う小蓮弁の数の変化、第二は月輪を支える蓮華座の形状の変化、第三は小蓮弁や蓮華座の彫刻方法の変化、そして第四は小蓮弁および蓮華座への塗色である。

（一）小蓮弁の形状・サイズ・数と彫刻方法の変化

十三世紀末期の銘を有する前述の井向の板碑は、阿弥陀三尊の梵字が彫られているが、これらの梵字をとりまく月輪外周にめぐらされている小蓮弁の[2]数は、五十～八十弁、同じ阿弥陀三尊の梵字が彫られている高雄神社の七重塔は、六十～六十四弁、および大谷寺の九重塔は、五十三～七十三弁で、これを月輪の円周長さ十センチ当り平均小蓮弁数で見ると九～十弁である。

この傾向は、大永三（一五二三）年銘の丸岡町上金屋の多層塔塔[3]身（主尊の月輪外周の小蓮弁は五十二弁、円周長さ十センチ当り平均小蓮弁数は十弁、弁の月輪直径方向寸法二センチ）が示すように、十六世紀初期まで継続していることがわかる（写真13）。

しかし、十五世紀末以降十六世紀にかけて、事例は少ないが変化が見える。十五世紀末から十六世紀初期の造立と推定する一乗谷の朝倉孝景（敏景）宝篋印塔塔身四面には胎蔵界四仏の種子が彫られ、それぞれの種子をとりまく月輪に十九から二十一弁の小蓮弁が彫られている。このうち開敷華王如来の種子「アー」を囲む月輪は二十一弁の小蓮弁がめぐらされ、小蓮弁は月輪直径方向の寸法が一・五センチ、月輪円周長さ十センチ当たり平均小蓮弁数が七弁、円周方向寸法は一・四～一・五センチである。（写真14）また、上越市林泉寺に所在の天正十八（一五九〇）年銘を有する堀秀政五輪塔の塔身の彫刻手法は、朝倉孝景塔に似ている。小蓮弁のサイズは月輪の直径方向と円周方向の寸法がほぼ一対一になっており（写真15）、明らかにこの二事例は前時代の遺品と異なる。

小蓮弁が特殊な形状をしているものもある。永禄四（一五六一）年の銘を有する武生市引接寺の多層塔の月輪に巡らされている小蓮弁は、連珠文とよばれ、数珠状のものが二重に配置されている（写真16）。拙者は数多くの小蓮弁を調査してきたがこの類例はいまだに他に知らない。彫刻手法から考察すると、蓮華座共々前述の朝倉孝景の宝篋印塔や堀秀政の五輪塔に見る厚肉彫刻に類似と考えてよいだろう。拙者は、これらは十五世紀後半から十六世紀における荘厳形式の変化の一系譜と考える。

十七世紀初期に入ると大きな変化が見られる。武生市正覚寺の慶長十四（一六〇九）年銘の超岳院宝篋印塔塔身の月輪外周にめぐらされている小蓮弁数は十三弁（写真18）、七

尾市長齢寺の慶長四（一五九九）年銘の高徳院（前田利家）宝篋印塔塔身の小蓮弁も十三弁（写真19）、正保年間頃造立とされる高岡市瑞龍寺の瑞龍院（前田利長）宝篋印塔は十四弁、織田信忠の宝篋印塔は十五弁（写真20）である。これらの宝篋印塔の円周長さ十センチあたりの平均小蓮弁数は、四・五～六弁で、前述の多層塔の約半分の数である。

野田山墓地に十四期基ある笏谷石製の宝篋印塔の中で、元和六（一六二〇）年銘の江月院（前田利貞）と慶長十八（一六一三）年銘の一陽院（村井長次）の二基の宝篋印塔に限って、塔身に陰刻されている小蓮弁は、丸鋸歯のごとく弁の先端を尖らせた形状で、蓮華座を含めて粗雑なデザインだが、小蓮弁の寸法の変化（月輪直径方向一に対し円周方向が一・五～二の比率）と陰刻線彫りの彫刻方法は、同時代の他の遺品と同じと見る。（写真21）この種の小蓮弁の形状は、小形の宝篋印塔の塔身などに時折見かける。

変わった例がある。金沢市普正寺町の中世墓地から発掘された宝塔[4]は紀年銘はないが、室町時代初期の遺品と推定されている。この宝塔の塔身（写真12）に彫られている月輪は、月輪そのものが太い破線状の浮き彫りになっており、一見、小蓮弁のように見えるが、越前式のデザインとは異なる。しかし、この頃すでに越前式荘厳形式が成立していたので、越前式の影響を受けていたと考えられる興味深い遺品である。

以上の結果を時代の変遷に沿って比較すると、変化のポイントは小蓮弁の形状に関係しており、主として十三・四世紀造立の石塔類に彫られている小蓮弁の寸法は、月輪の直径方向の寸法が円周方向の寸法より長く、その割合は二対一である。十五世紀末から十六世紀初期において、直系方向寸法は円周方向寸法とほぼ一対一になり、十七世紀初期になると、一対一・五から一対二となり月輪の直径方向より円周方向の寸法のほうが長くなる。併せて、小蓮弁のサイズも年を降るごとに大形化し、形状も蓮華花弁状から三日月状に変化してきている。

彫刻方法の変化という観点から見ると、十三・四世紀のものは一つ一つの弁を浮き彫りし、各弁の内側を凹状にする緻密な加工になっている。十六世紀初期、一部に厚肉で幾許か粗雑感のする彫刻の時代を経て、十七世紀初期には、陰刻の線加工になっていくなど、逐次簡素になってきている。

（二）月輪を支える蓮華座の形状と彫刻方法の変化

十三世紀末期から十四世紀の遺品に見られる蓮華座や反花座は、月輪の下側円周のおよそ三分の一の部分に整然と張りつき、緻密な浮き彫りの安定感がある。一部、十六世紀初期に、円周方向から水平方向に開いたデザインで、彫刻方法も従来に増して、厚肉浮き彫りの遺品（前述の朝倉孝景の宝篋印塔など）が見られる。しかし、十七世紀初期には、前述の小蓮弁もそうだが需要増対応へのシンプル化のためであろうか、ほとんどが陰刻線彫りになり、蓮華座のサイズも大きくなり、デザインの自由度も増し、大胆なものが出現してダイナミックではあるが、造りは雑になってくる。（写真18～22参照）

（三）小蓮弁および蓮華座の塗色

十七世紀初期、彫刻が雑または簡素になる一方で、月輪や蓮華座が彫られた面全体ある

いは一部分に塗色したり、線彫り部分に黒色を塗って強調する手法が生まれた。

正覚寺の宝篋印塔（写真18）の塔身のように、蓮華座や小蓮弁は金泥彩、月輪は朱彩縁取り装飾するといった他に例のない華やかなものもでてきた。

七尾市長齢寺の高徳院の宝篋印塔（写真19）は月輪内を、高岡市瑞龍寺の織田信長や信忠の宝篋印塔（写真20）は蓮華座や小蓮弁が彫られている塔身全面を塗色している。同様の例は、敦賀市の西福寺や永厳寺（ようごんじ）にある宝篋印塔の塔身にも見られる。

また、金沢市野田山の元和六（一六二〇）年銘の清雲院（奥村栄明）宝篋印塔は、小蓮弁や蓮華座などの線刻部分に、黒い塗料を塗って輪郭を強調している（写真22）。

同じ様式のものが、三国町性海寺の墓地にある慶長年間銘の一石五輪塔に線彫りされている蓮華座や小蓮弁にも見られる。

三　竪連子と格狭間を組合せた荘厳形式

この荘厳形式は、宝塔や宝篋院塔などの基礎部側面の各面を四つに分け、上部左右に竪連子、下部左右に格狭間を組合せて表現する方式である。連子とは、菱形の連子（れんじこ）と称する組子を明り取りや通風のために利用したもので、この様な窓は連子窓と呼ばれている。連子を縦に並べたものを竪連子、横に並べたものを横連子といい奈良時代から存在するものである。

この連子窓の形式が、十四世紀始め頃から笏谷石の石造物に取り入れられてきた。その目的は、宝篋印塔など墓塔の基礎部分は霊の宿る場所として、その部分に光や風が入るようにとの配慮から生まれたのではないかと想像される。

格狭間は、上部が花頭曲線、下部が椀形で、須弥壇、露盤、桟唐戸など塔、堂および仏像などの台座部分の飾りとして多方面に使用されているデザインで、重いものを支えるための構造を表現しており、基礎部分に装飾されることから発達したようであるが、後には使用場所の制限もなくなり、単なる装飾として使われるようになってきたといわれている。

竪連子と格狭間が彫られた越前の石塔で、現状知る紀年銘ある最古のものは、大谷寺の観応三（一三五二）年銘の丸山宝塔（写真23）である。宝塔に彫られている例は、丸山宝塔の他は福井市藤島町の白山神社[5]の宝塔など、事例は少ないが、宝篋印塔の基礎側面には多く取り入れられてきている。

越前・若狭では、三国町性海寺の明応八（一四九九）年銘を有する宝篋印塔の基礎は側面三面に鮮やかな竪連子と格狭間の彫刻を遺している。小形の宝篋印塔では武生市宝円寺の天正八（一五八〇）年銘の長齢妙久（前田利家母）宝篋印塔（写真24）、窓安寺の天正二（一五七四）年銘の月泉宗鏡（朝倉景鏡）塔などにこの荘厳が取り入れられており、大形の塔では敦賀市疋田の共同墓地[6]および小浜市常高寺の寛永十（一六三三）年銘常高院宝篋印塔など多くの遺品が所在する。

越前以外でもこの荘厳形式の遺品を多く見ることができる。

金沢市野田山では、加賀藩前田家の墓地を中心に、十四基まで数えた。また、前田家の菩提寺である宝円寺に三基、七尾市の長齢寺に二基、龍門寺に十基、本行寺に二基、宝幢

寺に二基および高岡市では瑞龍寺に五基所在し、いずれも十七世紀初期に造立された宝篋印塔である。

佐渡相川町の大安寺にある大久保長安の慶長十六（一六一一）年銘の宝篋印塔（逆修塔）、新潟県上越市の林泉寺にある寛永年間銘の四基の宝篋印塔、さらに遠くでは北国船の絵馬で有名な青森県深浦町円覚寺に、十七世紀初期に移出されたと推定される宝篋印塔（写真25）、北海道松前町法幢寺の松前藩主墓地にある多くの五輪塔の中、ただ一基の松前盛広室椿姫の寛永十三（一六三六）年銘の宝篋印塔も竪連子と格狭間が彫られている。

この種の笏谷石の遺品は、数では圧倒的に越前より北に多いが、南への移出もかなりの数がある。京都市寺町本満寺の元和七（一六二一）年銘の蓮乗院（松平秀康室）の宝篋印塔、滋賀県山東町の佐々木京極家の菩提寺清滝寺にある三十四基の宝篋印塔は、ほとんどが花崗岩や砂岩を使用しているが、これらの中で、若狭小浜藩主であった京極高次の慶長十四（一六〇九）年銘の宝篋印塔は、唯一笏谷石製で、この二基の宝篋印塔の基礎にも竪連子と格狭間が彫られている。

十七世紀初期、この種の宝篋印塔は大名やその家族、または高位の武家の墓として、数多く越前から移出されていたことがわかる。これらの墓は後述の石廟に安置されているものが多い。

竪連子と格狭間のデザインも、時代の変遷と共に少しずつ変化しているが、この変化は十七世紀初期に顕著に現れる。基本的な形式は上に竪連子、下に格狭間を配置するが、前述の龍門寺の十基の宝篋印塔の中には、竪連子と格狭間の配置が逆になっているものもあり、とくに格狭間のデザインは多様（写真26～28参照）である。さらに、元和三年（一六一七年）の銘を有する妙観寺（福井市）の宝塔の基礎のように、竪連子と格狭間を一つにした図柄にまで発展したものもある。

四　屋形風石龕と石廟(7)

宝篋印塔や五輪塔を納めた屋形風石廟の代表的なものに、高野山の結城秀康廟、金沢市野田山の前田利家の子女と家臣の石廟、高岡市瑞龍寺の前田利長石廟および北海道松前藩歴代藩主石廟などがあるが、これらは越前の笏谷石を使用し、独特の荘厳が施されたものである。拙者は、この形式の石廟は、越前地方の神社に見る石龕をその発祥の起源と考える。

（一）石　龕

越前の平野部において、ほとんどの神社に、笏谷石の石龕が一基または複数基造立されている。これらの石龕の形式は、神社建築様式である照屋根を有する切妻造と寺院建築様式の入母屋造の二種類がある。正面に、太陽や月を象徴する円や三日月が掘られ、内部には主に仏像が安置されている。また、屋根に石鬼を配置しているものも多い。

石龕の造立目的は、経典や仏像を安置することにあった。

紀年銘が彫られている石龕は少ないが、弘治二（一五五六）年の紀年銘を有する福井市重立町の日吉神社の石龕は、在銘ある遺品の中では旧いものの一つである。この石龕は大型で切妻造・平入り、屋根には石鬼が配置され、内部に阿弥陀如来像が安置されている。

三国町瀧谷寺（たきだんじ）に元亀三（一五七二）年銘の

開山堂（写真29）がある。切妻造り平入構造で、内側の壁に十三仏を浮き彫りし、石龕の中に開山睿憲（応永二十七年銘）、四世頼住（延徳三年銘）の坐像および両僧の墓が安置されている。

福井市次郎丸町の岡西光寺の境内に、一体の石仏を安置した石龕（写真30）がある。この石龕の屋根にユニークな顔の石鬼が配置されている。向かって右側面に文字が彫られているが、風化剥落しているため紀年銘は確認できない。周囲に点在している板碑、石仏および五輪塔などは明応、永正、大永および天文の銘を有するものばかりであり、この石龕もこの時代に造立されたものと推定している。

丸岡町の称念寺。境内に、十六世紀中期の石仏が浮き彫りされた石龕の側壁や奥壁が数多く所在する。これらの中から天文十八（一五四九）年銘の遺品を確認した。

その他、鯖江市の神明社に文禄三（一五九三）年銘の納経石龕（写真31）が、また無銘であるが、丸岡町豊原寺の閼伽井、春江町田端の神明神社および金津町稲荷山の八幡神社の石龕などは、特徴ある表情豊かな石鬼が配置されている。

石龕は十五、六世紀以降、経典や神仏安置を目的に造立されるようになった。瀧谷寺の開山塔は、使用目的が経典や仏の安置から墓碑安置に変わる過渡期の遺品で、十七世紀初期には宝篋印塔や五輪塔を安置する廟として使用されるようになる。

（二）石　廟

十七世紀初めから中頃にかけて大型の石廟数多く造立された。これらの石廟には前述の宝篋印塔や五輪塔を安置している。石廟の基本となったデザインは、先に述べた石龕である。さまざまな荘厳手法を採用し、藩主や地位の高い人々の宝篋印塔や五輪塔を安置するための「やしろ」（写真32～34参照）として使用され、京都、近江、加賀、能登、越中、越後および遠くは蝦夷松前まで移出されている。これらの石廟は、虹梁や蟇股など寺院建築の手法が採用され、天女や仏の彫像を配した豪華なものも多い（写真35～37）。また石廟の扉や内面に着色された蓮華花葉が描かれているものもある。

武生市京町の正覚寺の超岳院石廟は内部に蓮華の花葉が描かれ、墓は前述のごとく金泥や朱で塗色され、幼少にして没した悲しみが伝わる遺品である。

高野山の結城秀康の石廟は入母屋造り、唐破風屋根を有する現存の笏谷石製石廟の中では最も大型。墓に慶長十三（一六〇八）年の銘がある。この石廟の左隣に秀康の母長勝院の石廟（切妻造り）があるが、この石廟に修められている墓には慶長九（一六〇四）年の銘が刻まれている。

滋賀県山東町の清滝寺は、佐々木京極家の菩提寺で、歴代の墓にまじって若狭藩主だった高次の石廟がある。切妻造り妻入り構造。蟇股の左右に日と月、虹梁の真下に天女像、扉の左右に毘沙門天と不動明王の浮彫り像を配した豪華な越前石廟の典型である。中に、前述の宝篋印塔を安置している。

七尾市小島町の長齢寺は前田利家父母の菩提寺。ここに利家と利長の二基の宝篋印塔を安置した石廟（切妻造り・平入り構造）がある。屋根のすぐ下に前田家の梅鉢の紋を浮き彫りにし、羽目石に竪連子と格狭間が彫られ

ている。前扉は破損して外されているが、ダイナミックな蓮華の花葉が彫られている。

金沢市野田山の前田家墓地に前田利家の大十四子利貞廟（写真32・35）、前田家の重臣村井長次室春香院廟など八基[8]の石廟がある。とくに春香院の石廟には正面左右の不動明王と毘沙門天の他、楽器や幡を持った二十五菩薩が浮彫りされている。

高岡市の瑞龍寺は前田利長の菩提寺であるが、ここに利長の石廟（写真33・36）以外に、彼に縁ある四人（前田利家、織田信長と室、織田信忠）の石廟がある。利長の石廟は前面左右に不動明王と毘沙門天を、側面と後面に阿弥陀如来と二十五菩薩を浮彫りしている。

佐渡相川町大安寺の大久保長安の逆修塔を納めた石廟は、後部内面に地蔵と観音の立像が浮彫りされている。また現状の両側面は補修により別質の石板が使用されている。

北海道松前町の法幢寺に松前藩歴代藩主の石廟がある。二十四廟のうち十一廟が笏谷石製、安置されている墓の紀年銘によると、寛永十八（一六四一）年から宝暦四（一七五四）年の百十三年間にわたっている。典型的な越前式で、紅梁の真下に天女の像を浮彫りしている石廟（写真34・37）もある。宝暦年間以降の石廟は、全て瀬戸内の花崗岩を使用（石廟の形式は、それまでに設置された笏谷石製の石廟を習った切妻造り、妻入り構造であるが、天女などの彫刻は彫られていない）していることから、この頃から本格的な蝦夷地と大阪を直に結ぶ北前船貿易時代に入ったことを伺わせる遺品群である。

また、京都市の本満寺にある松平秀康室の石廟は、内部に厚肉の六体の如来像が彫られ、蓮華の花葉が描かれ、紅梁上に配置されている天女像などに、青や白の塗色がされている。

以上の大型の石廟は、松前町宝幢寺の遺品のように、一部十八世紀中期のものもあるが、北陸地方を中心に所在のものは、納められている墓が慶長から寛永年間の銘を有しており、造立時期は十七世紀初期、遅くとも十七世紀前半期末までと推定している。

以上主だった大型の石廟によって、越前石廟の特徴と造立時期の検討をしたが、小型のものまで含めると、例えば、三国町の性海寺に十三基（これらの中で天正・慶長年間の銘を有する五輪塔を安置しているものもある）、敦賀市原の西福時に十一基、また武生市の宝円寺や龍門寺などにも多く所在し、神社にある石龕と同じで数に限りがない。小型の石廟は、前述の大型の石廟のように豪華な荘厳を施されているものはほとんど無く、簡素なものばかりである。

五　唐破風屋根を有する墓標

合掌部が山形に反りまがった曲線状をなす破風、いわゆる唐破風（からはふ）造りと呼ばれる様式が寺院・神社の屋根や軒に多くみられるが、この建築様式は、平安時代末期から鎌倉時代にかけて出現したものと言われている。このデザインは、江戸時代に石廟の軒や墓標にも取り入れられ、とくに、笏谷石製で、頭部に唐破風屋根を有する板碑状の一石墓標は、日本海沿岸の各地で見られ、越前は勿論、加賀、能登および越中に非常に多く、遠くは下北半島・松前・江差などにも多く移出された。この墓標は前面のみが加工され、裏側は採掘地で切出した時の「ノミの跡」が残されている

のが特徴である。

風化して文字が剥落しているものが多いが、紀年銘を確認できるいくつかの例を述べれば、能登と越中の国境にある石動山に明暦から享保年間の銘を有するもの（写真38）、氷見市の上日寺に元禄から寛延年間（写真39）、および高岡市の国泰寺には貞享、元禄などの紀年銘を有する墓標が見られる。今までの拙者の調査では、七尾市宝幢寺の寛永五（一六二八）年銘が最も旧いものであった。

また、北海道松前町法幢寺の松前家墓地（写真40）や法源寺の蠣崎家墓地や、その他の墓地でもこの墓標が多く遺されている。特徴として、早いもので十七世紀初期、一般には十七世紀中期から十八世紀にかけての銘を有する遺品が多いことを特筆しておきたい。

時代の変遷によるきわだった形の変化は見られないが、莫大な数の唐破風屋根を有する墓標が、日本海沿岸の津々浦々に運ばれた。これらは初期の北前船の遺産であると言えよう。

六　あとがき

笏谷石が生んだ越前式荘厳形式の石造物の移出を、京田良志氏は『松前藩と松前』二号（一九七三年）に発表された論文「松前家墓所の成立と越前石の副題に「越前石文化の北伝」表現されている。拙者もまさにその通り、文化の移出だと思っている。

これまで述べてきたように、文化といわれる背景には越前独特の荘厳形式を生み、変化しながらはぐくまれてきた長い歴史があり、一朝一夕に生まれたものではないからである。

笏谷石の採掘の灯[9]が消え、この石の供給が途絶えた今、長い歴史の中で祖先が遺してくれた笏谷石の文化遺産を大切にし後世に継ないでいきたいものである。

最後に、平成十五年五月、京田良志氏が逝去された。京田氏には各種の資料を提供して頂いたり、懇切丁寧な特別のご指導を頂いた。拙者の笏谷石研究の今日あるのは京田氏によるところが多い。衷心から御礼申し上げ、謹んでご冥福をお祈りします。

以　上

注記

(1) 京田良志「蓮弁周縁月輪の起源について」（『富山市日本海文化研究所報』第24号　富山市日本海文化研究所　平成12年3月発行に所収）

本論文のなかに、増永常雄氏、川勝政太郎氏および京田良志氏が、朝日町大谷寺の多層塔、丸山宝塔および福井市本堂町の高雄神社の多層塔などを調査され、「越前式荘厳」と命名したいきさつが報告されている。

また、氏はこの論文で、月輪四分の一円周あたり蓮弁数の変化を基準にして、時代の経過に伴う荘厳形式の変化を把握する試みをされている。

(2) 月輪下端に蓮華座が配置されている場合、一般的に蓮華座部分の月輪外周に小蓮弁が省略されているケースが多い。しかし、反花座が配置されている場合には、逆にこの部分に小蓮弁が彫られている例が多い。本報告では、数値を使って比較する際の基準を明確にするため、蓮華座部分に小蓮弁が彫られていないものを対象にした。

(3) 最近、この塔身の紀年銘を文永三（一二六六）年とする三木治子氏の新しい提唱がある。

三木治子「越前式月輪の石造物・編年の試み（I）」（『歴史考古学』第51号　歴史考古学研究会　平成十四年発行に所収）

三木氏の提唱について、拙者の見解は、拙著『越前笏谷石』にとりあげたように、この塔身の月輪外周の小蓮弁、蓮華座、および反花座の彫刻が、文永十一年銘（一二七四年）を有する春江町井向の白山神社の板碑の彫刻に似ていると述べた。

また、拙者のこれまでの各地の遺品の調査では、この塔身に彫られているような小蓮弁や蓮華座のデザイン、彫刻手法は十六世紀の他の遺品には見られなかった。もし、この塔身の銘文が文永三年だとすると、小蓮弁や蓮華座が、時代の経過に従って変化する歴史の整理もすっきるするのだが。

この塔身に遺されている銘文は一部欠落しているため、大永、文永いずれと読むか苦慮する点はあるが、遺されている文字の部分を細かく観察すると、やはり大永と読む方が妥当と思う。三木氏の新しい提唱には敬意を表したい。

(4) この宝塔は石川県立歴史博物館に展示されている。

普正寺中世墓地で採掘された当事は五輪塔として報告され、近年まで五輪塔として同博物館に展示されていたが、その後、辰口町宮竹墓谷中世墓地から発掘された宝塔と類似であることがわかり、現在は同時に発掘された相輪が載せられている。この宝塔は、笠（火輪）から下の形状は五輪塔と全く同じであるが、笠上端に反花座が彫られ、相輪最下部の請花と対をなしている。

参考資料　三浦純夫「中世加賀における石製宝塔の系譜」（『加能史料研究』第15号二〇〇三年三月に所収）

(5) この宝塔の基礎側面正面上側に一対（二個）の竪連子が彫られており、下側に格狭間は見られない。これと同類デザインは各地で散見される。具体的な一例を述べれば、慶長年間の銘を有する宝篋印塔二基が宝円寺（金沢市）所在する。

(6) 朝倉義景に従って、天正元年刀根坂の合戦で戦死した斎藤龍興の宝篋印塔といわれているが、平成五年八月中旬、心なき者による盗難に遭遇して、今はこの墓地に所在しない。

(7) 矛盾があるかも知れないが、拙者は便宜上本稿では仏像や経典を安置しているものを石龕、墓を安置しているものを石廟と区分している。

(8) 拙稿「野田山墓地のおける越前笏谷石製の石塔類について」

（『えぬのくに』第48号　江沼地方史研究会　平成十五年発行に所収）

本稿のなかで、野田山墓地に所在する八基の笏谷石製石廟の詳細を報告した。

(9) 平成十一年九月、笏谷石の最後の採掘会社「越前石」が採掘作業をやめ、千六百年続いた採掘の歴史は閉じた。

小蓮弁をめぐらされた月輪ー１（13～14世紀）

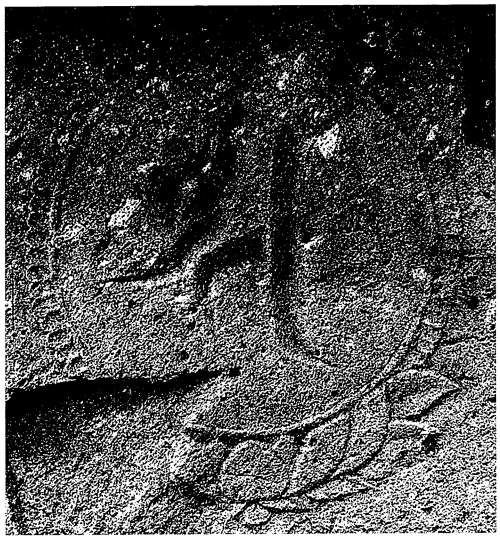

写真２；高雄神社七重塔（福井市本堂町）
正応３（1290）年銘

写真１；白山神社板碑（春江町井向）
文永11（1274）年銘

写真４；国中神社多層塔（今立町中津山）
無銘

写真３；樺八幡神社七重塔（美山町東河原）
無銘

小蓮弁をめぐらされた月輪ー２（14世紀）

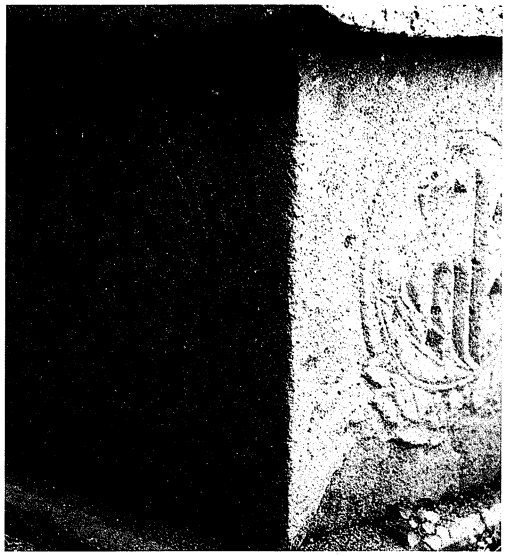

写真６；智原神社多層塔（福井市高屋町）
２基あり、いずれも無銘

写真５；一姫神社多層塔（塔身のみ）
（福井市八日市町）無銘

写真８；薬師神社多層塔（塔身のみ）
（福井市高尾町）無銘

写真７；大谷寺九重塔（朝日町大谷寺）
元亨３（1323）年銘

小蓮弁をめぐらされた月輪ー3（14〜15世紀）

写真10；住吉神社板碑（春江町高江）
正慶元（1332）年銘

写真９；大谷寺丸山宝塔（朝日町大谷寺）
観応３（1352）年銘

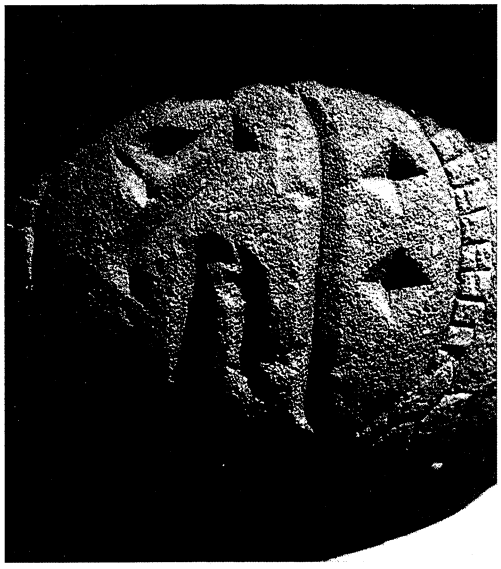

写真12；普正寺宝塔（金沢市普正寺町）
石川県立歴史博物館所蔵　無銘

写真11；慶法寺多層塔（三国町新保）
無銘

小蓮弁をめぐらされた月輪ー4（16世紀）

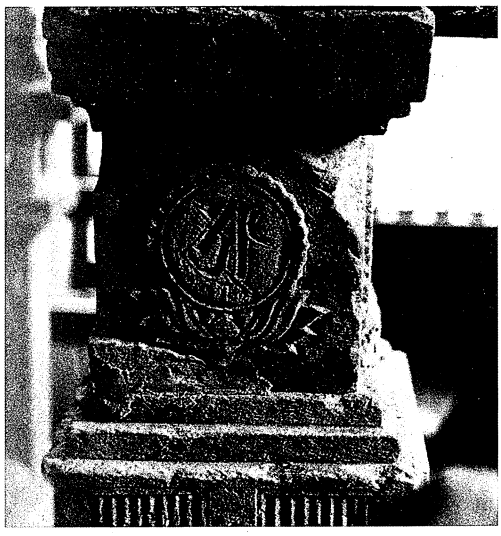

写真14；朝倉敏景宝篋印塔
（福井市城戸ノ内町）
基礎は下2/3が欠落し遺失

写真13；八幡神社多層塔
塔身のみ所在（丸岡町上金屋）
大永３（1523）年銘

写真16；引接寺多層塔
二十の連珠文（武生市京町）
永緑４（1561）年銘

写真15；林泉寺五輪塔
堀秀政塔（上越市中門前）
天正18（1590）年銘

小蓮弁をめぐらされた月輪ー5（16〜17世紀）

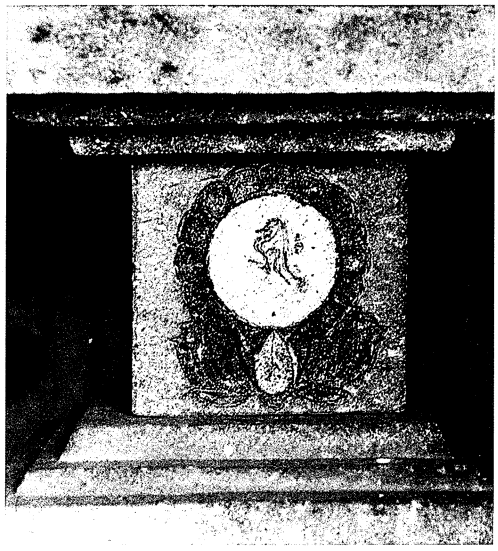

写真18；正覚寺宝篋印塔
超岳院塔（武生市京町）
慶長14（1609）年銘
金泥塗色されている

写真17；西山光照寺石碑（福井市安波賀町）
天文24（1555）年銘
蓮華座のない月輪

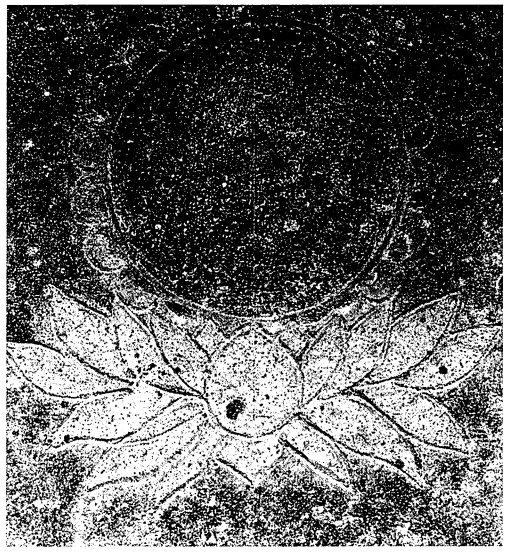

写真20；瑞龍寺宝篋印塔
織田信忠塔（高岡市関本町）
塔身全面に朱を塗色

写真19；長齢寺宝篋印塔
前田利家塔（七尾市小島町）
慶長４（1599）年銘
月輪内に朱を塗色

小蓮弁をめぐらされた月輪ー6（17世紀）

写真22；野田山宝篋印塔
奥村栄明塔（金沢市野田町）
元和6（1620）年銘
陰刻部分へ黒の塗色

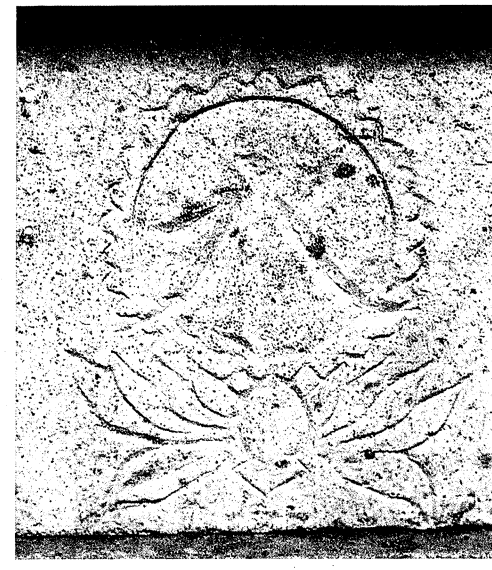

写真21；野田山宝篋印塔
村井長次塔（金沢市野田町）
慶長18（1613）年銘
丸鋸歯のような小蓮弁

竪連子と格狭間ー1

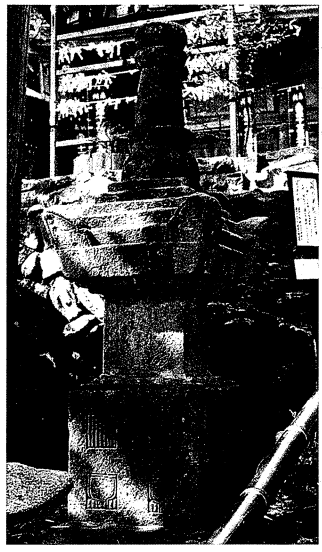

写真25；円覚寺の宝篋印塔
（青森県深浦町）
17世紀初期

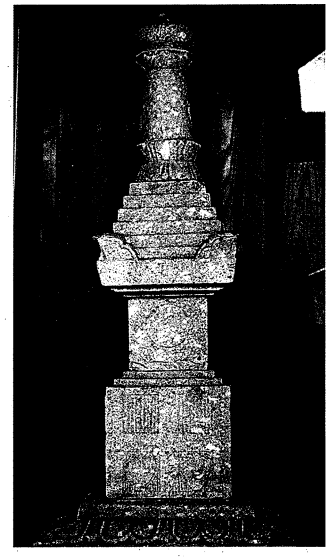

写真24；宝円寺宝篋印塔
（武生市）
天正8（1580）年銘

写真23；丸山宝塔（朝日町）
観応3（1352）年銘

竪連子と格狭間ー２（七尾市龍門寺の宝篋印塔基礎の荘厳）

写真26；竪連子と格狭間の配置が上下逆になっている。
貞享年間銘

写真27；格狭間の花頭曲線も多様
（写真28も参照）
寛永19年銘

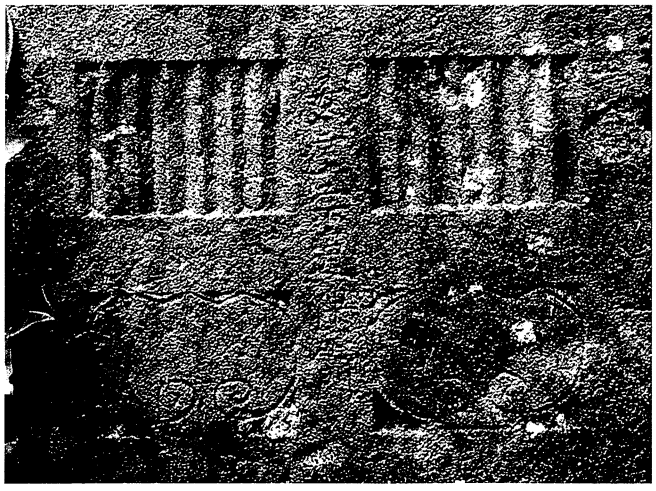

写真28；寛永18年銘

石龕と石廟－1（石龕）

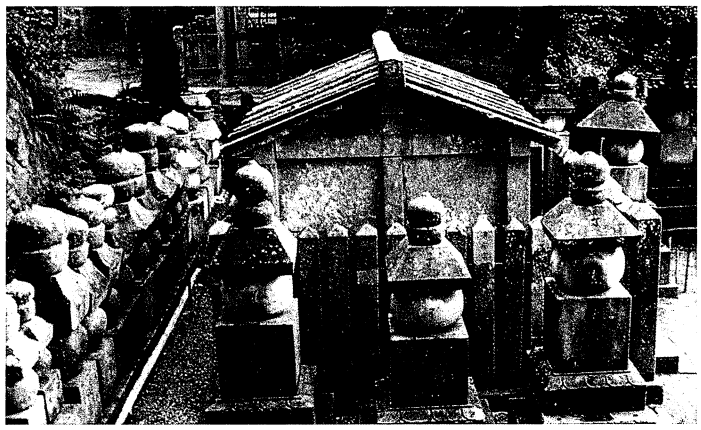

写真29；滝谷寺開山堂
（三国町）
元亀3（1572）年銘

写真30；岡西光寺石龕
（福井市次郎丸町）
16世紀
右側の写真は側面
の石鬼の部分

写真31；神明神社石龕
（鯖江市神明）
文緑3（1594）年銘
納経石龕

石龕と石廟ー2（石廟）

写真32；前田利貞廟
（金沢市野田町）

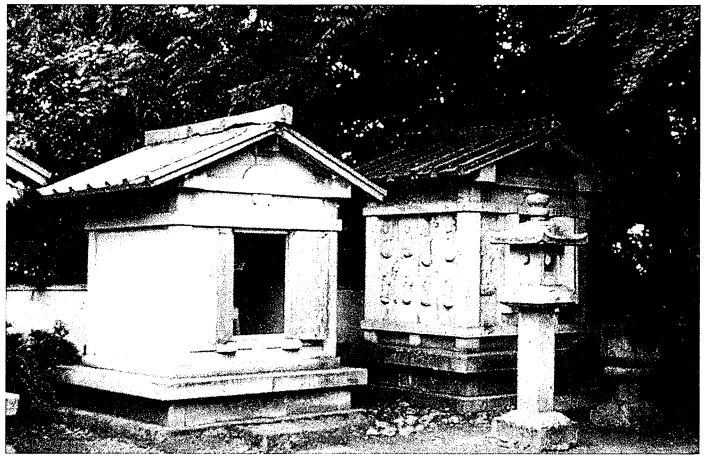

写真33；瑞龍寺の
前田利長廟（右）
前田利家廟（左）
（高岡市）

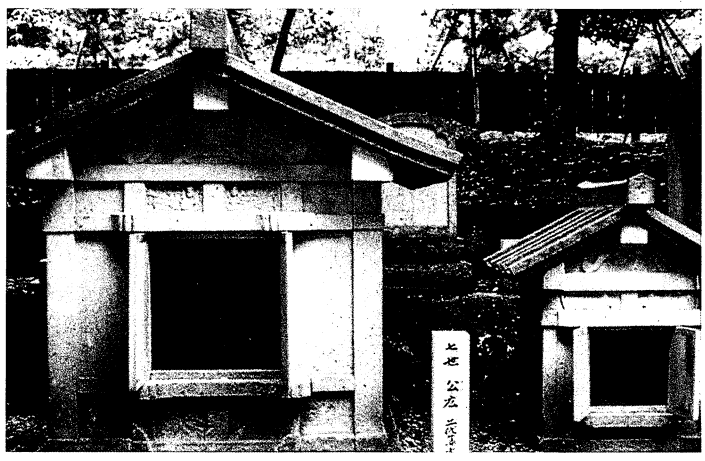

写真34；法幢寺の
松前公広廟（左）
（北海道松前町）

石龕と石廟ー３（石廟前面虹梁周辺の荘厳）

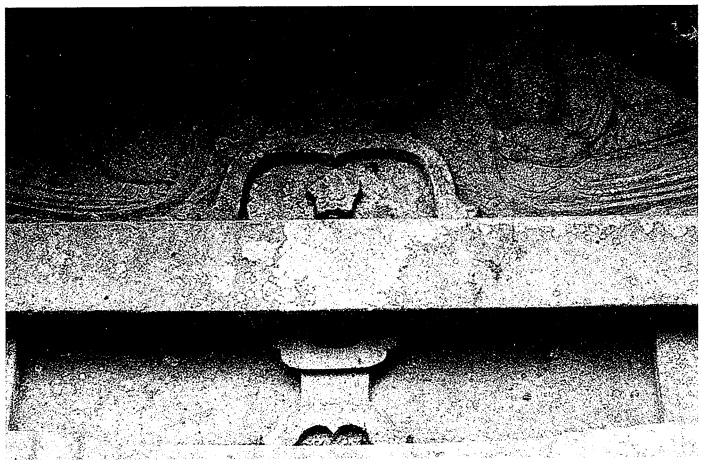

写真35；前田利貞廟
（金沢市）

写真36；前田利長廟
（高岡市）

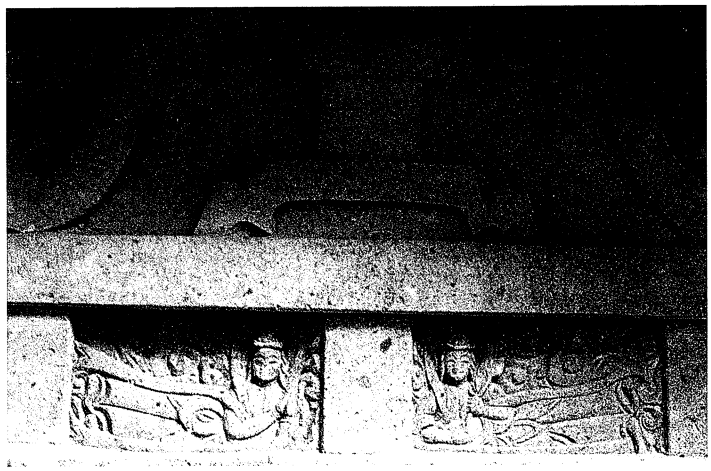

写真37；松前公広廟
（松前町）

唐破風屋根つき墓標

写真38；石動山
（石川県鹿島町）

写真39；上日寺（氷見市）

写真40；法幢寺（松前町）